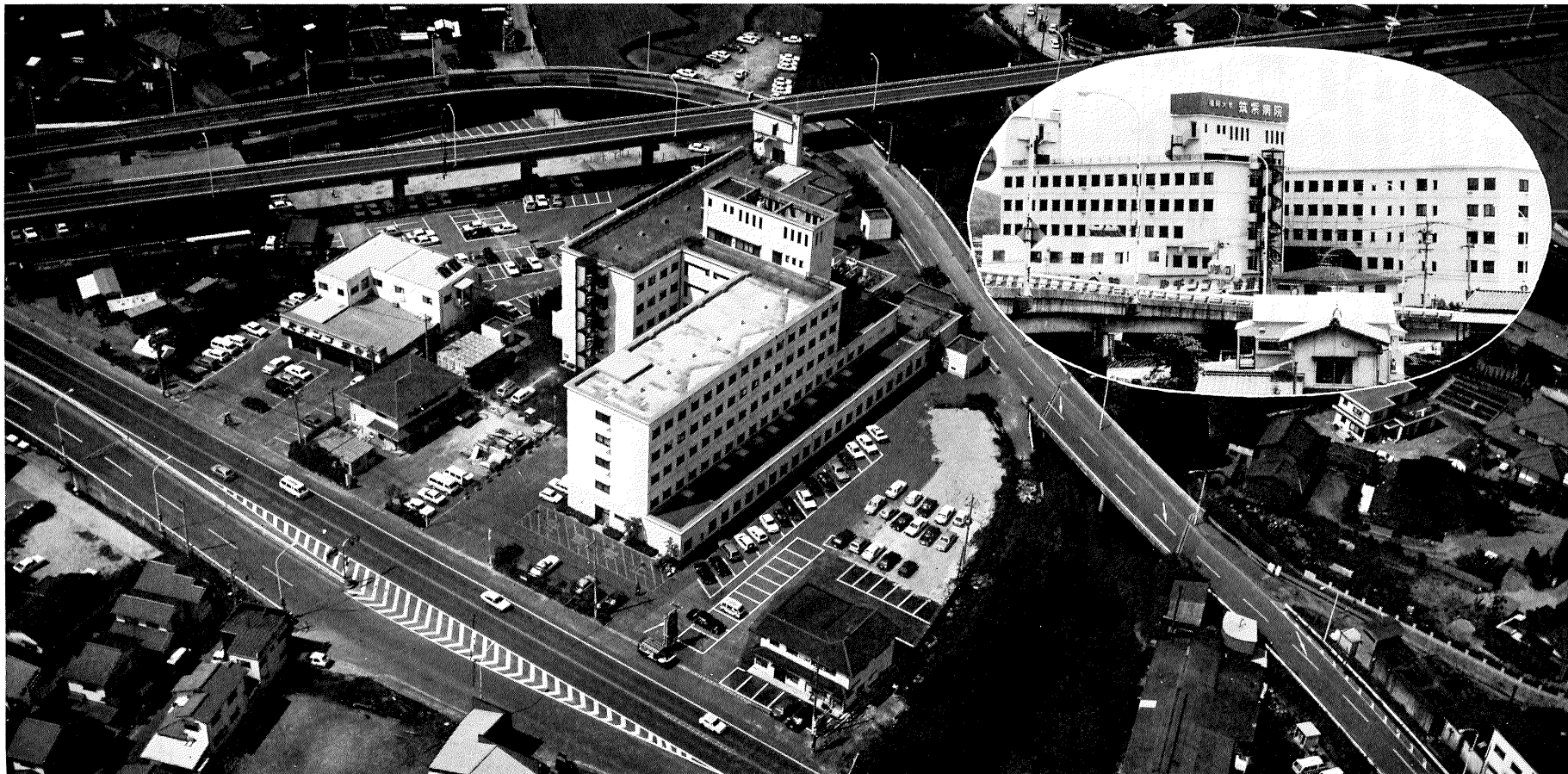


福岡大学医学会ニュース



(写真1)

筑紫病院発足記念特集号

福岡大学筑紫病院の 開院にあたって

筑紫病院長 奥村 恂

筑紫病院設立の背景

約十五年前に立てられたわが国の医師の需給計画は、予想よりも早く達成し、医学部入学生定員の見直しが必要と論ぜられるようになってきた。同時に医療の内容、医師の質の向上が問われるようになった。従来、卒業教育や生涯教育という用語は、いささか観念的に理解されていたが、昨今ははっきりと意味のある言葉となってきた。大学病院には高度の医療を通じて、医学部の卒前の臨床教育と、卒後の臨床研修の場を提供するという使命が課せられている。厚生省の卒後一年間の研修補助金支給の基準は、約病床数一〇に対して研修医一である。福岡大学病院の病床数は八五〇床であるので、研修医の適正数は八五名である。これは一年間の延べ数であるから、各年次の卒業生の約半数しか受入れられない計算である。

わが福岡大学医学部は歴史の浅い医学部であるだけに、安心して卒後研修をお願いできるような病院は皆無に近い。このようなことは福岡大学増設の当初から予想されていたことで、研修用病床の確保は焦眉の急となっていた。このような背景の中で、第二病院作りが具体性を帯びてきたのは、ほぼ二年前からである。

開院までの経過

このような時期に、筑紫野市俗明院にあった閉鎖病院がクロスアップされた。この病院に関する情報がマスコミから報道され、本学が筑紫野市進出の希望をもっていることがわかった。筑紫医師会（春日、大野城、太宰府、筑紫野の四市と那珂川町）がいち早く絶対反対を決議し、福大対策委員会を設けるなどして大規模な反対運動が展開された。五十九年春頃までの地元医師会の反対は相対的に熾烈で、故小野山伝六先生を委員長とする福岡大学筑紫病院開設準備委員会との協議も、一時は険悪なムードになったこともあった。相方一〇回にわたる協議で医師会側も軟化、本年一月、医師会は反対を決議撤回、医師会のいわゆる条件闘争の話合いにはいり、六月十八日「覚書」を交換し、円満に解決した。

一方、買収した病院は福岡大学筑紫病院として、外来部門のうち外科系を増築し、放射線部門を主とする内部改装が行われて開院に備えた。

昭和六十年六月二十七日はいよいよ開院の日であったが、午前十一時より、病院の一階で開院式が開かれた。参加者は約二〇〇名であった。山本哲夫副理事長、伊東正則学長の挨拶に続いて、田中健蔵九州大学学長、石田正太郎県医師会長、表猛筑紫医師会長から祝辞をいただいた。田中学長の地域医療の中心として機能するだけでなく、広域医療への参画を考えた、との激励は身に沁み、式の最後に院長奥村が謝辞と各診療科部長の紹介を行った。

ひきつづいて場所を大丸別荘に移し、開院祝賀会が開かれた。ここでは久留米大学加地正郎院長や松田正彦筑紫野市長から祝辞をいただいた。

このような迂余曲折を経て、昭和六十年七月一日に待望の診療開始を迎えることができた。

筑紫病院の周辺

病院は筑紫野市俗明院にあ

る。すぐ傍を西鉄大牟田線、国道三号線、国鉄鹿児島線が競り合うようにして走っている。病院のすぐ北から東を県道五号線からの降り口の道路が、鉢巻きのようにとり囲んでいる（写真1）。南側に接して山口川があり、南から東を囲繞している。この山口川は一級河川で背振山地に源を発し、途中山神ダムを湛えて病院の傍を流れて、宝満川へ注ぎ、さらに筑後川へ合流する。したがって、この付近は筑後川水系である。筑紫野市の上水道は山神ダムから取水しているという。

このように地理的には筑前と筑後の接点である絶妙の地にあるといえるが、鉄道、道路、川に囲まれて、病院の周辺に土地の余裕がないことが本院の最も大きな弱点である。

行政区は筑紫野市であるが、四市一町の筑紫保健所管内の人口は約二〇万といわれる。

俗明院という地名はいまひとつしっくりしないと思っていたが、国道三号線（写真の手前）にかかる橋は「ぞくみょういんはし」とあり、地図には「純命院橋」と記されている。俗明よりは純命がよい。純命となれば、われわれ医療従事者にとっては何とありがたいはなむけの言葉であることがわかった。

筑紫病院の規模

病院は五階建鉄筋コンクリート作りで、床延面積は二一、〇四五平方メートルである。各階の使用用途は、一階が外来部門、臨床検査部、放射線部、栄養部、医事課など、二階が手術部、ICU病棟、材料部、薬剤部など、三階は南が小児病棟、北が主に整形外科、脳神経外科、四階は内科、消化器科、

外科が使用している。（図1）五階は南が管理部門、北が研究室（医局）として臨時的に転用している。この五階部門は近い将来、病棟として使わねばならないから、管理部門、研究室（医局）などは別館が建てられる予定である。

病院の組織

筑紫病院の発足時の組織図は図2に示すとおりである。大きく五部から成り、診療部は現在八科である。中央診療施設部は七部であるが、栄養部、病歴部を加えた点が目新しいところである。教職員ならびに診療スタッフを表1に示す。

病院運営の基本理想

病院の開院式で述べた基本理想は次のようなものである。

「福岡大学筑紫病院は高度の医療を通じて地域社会に貢献しようとして開設されたものでありまして、ここでは、患者さんを中心として診療各科の枠を越えた全人的医療、第三次医療を行います。七隈の福岡大学病院や、地元医師会との密接な連携を保ちながら、日進月歩の医学、医療を推進し、取り入れ、地域医療の中核になるものとするものであります。大学病院であるため、医師の卒後研修、医学部の臨床教育の場としての役割を果たし、臨床研究を主とする医学研究も行い、医学、医療の進歩に貢献する責務も果たすよう努力します」

筑紫病院は、その規模からいえば、最終的には三、四、五床の中型の病院であるので、各診療科単位の枠にとらわれずにチーム医療システムを組むことが容易である。ベッドの傍に各診療科の医療担当者

が集って、診断や治療を計議する、患者中心の集中診療を目標としている。

すなわち、高性能の医療機器、気鋭の専門医スタッフ、それに医療チームの心を加えた三位一体の実践がわれわれの目標である。

これからの課題

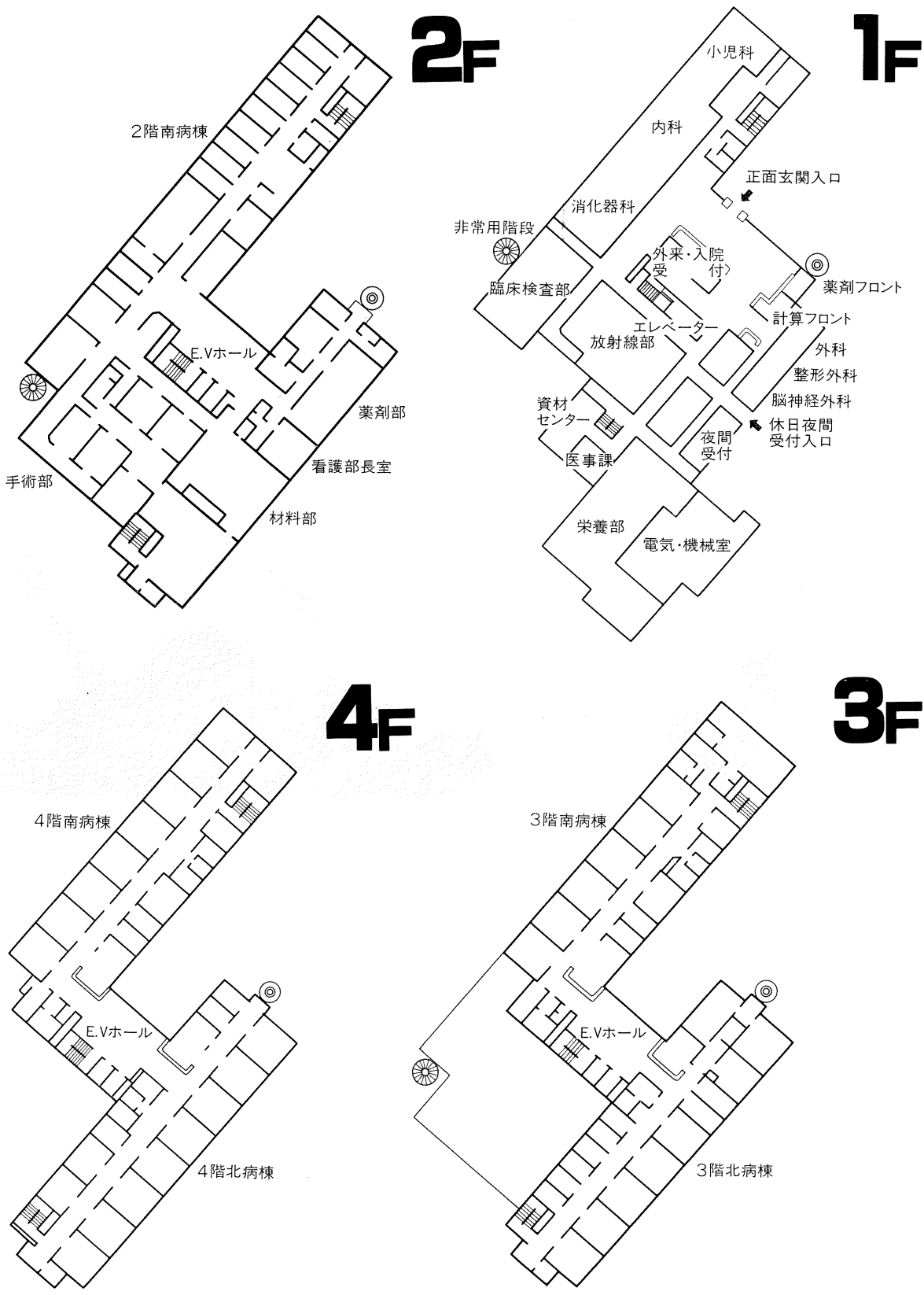
昨今の医学、薬学の進歩、医療機器の発達、高令化社会の出現、疾病の複雑化などにつれて、わが国の医療費の膨張は社会的な大問題となってきた。いまま、医療費削減は国家的施策である。健康保険診療をいかに切り、大学といえども特別な配慮は一切なされない。

本来、医療の質と収益性は相容れないものである。この矛盾をいかにして両立させることができるか。少々の努力では実現は不可能である。

高度医療の実践と、教育研修病院としての機能を発揮するためには、教育力リキユムや事務の電算化などのソフトの能率化はもろんであるが、教育研究棟、管理棟、生活労働環境の整備などが急がねばならない。さきに述べたように筑紫病院の物理的条件には大きな制約があるので、大へんな工夫が要求されよう。

われわれ一同は、このような多くの課題を抱えながら、設立の趣旨である、最高の医療を通して臨床研修の場を確保し、地域医療にとどまらず広域医療の向上にも挑戦しようとするものである。福岡大学医学会の各位も、筑紫病院を自らの問題として捉えていただきたいと願っている。（診療開始の日を目前にして逝去された故小野山伝六先生に謹んで黙禱いたします）

(図1) 各階の見取図



教室紹介

福岡大学内科学第二

昨年十月に、第七回日本高血圧学会が、荒川規矩男会長の下に開催されました。ユニークな田講師、腎臓(内藤助教授)、国際的企画と円滑な運営で好評でした。
現在、福岡大学の内科は、二つに分かれています。その五つの内科で内科学の全専門分野をカバーし、かつ重複を避ける診療の各分野で活動し、機能するという方針の下に、当教室では、ながら、相互にも緊密に有機的に連携を保ちつつ、内科学を勉強する場として活動しています。
開講十二年になり、当教室でも本学卒業生が、スタッフ、大学院生、米留学経験者として研究に教育に診療に活躍し、現在も三名が米留学中です。これらの若い学生を、十二年の古い袋に盛って、更に新しく大きな発展を期しています。
現在、当教室の人事は左記の通りです。
医局長 中島与志行
副医局長 向野 義人
六階東病棟主任 亀井 律
六階南病棟主任 児玉 武利
(文責 中島)

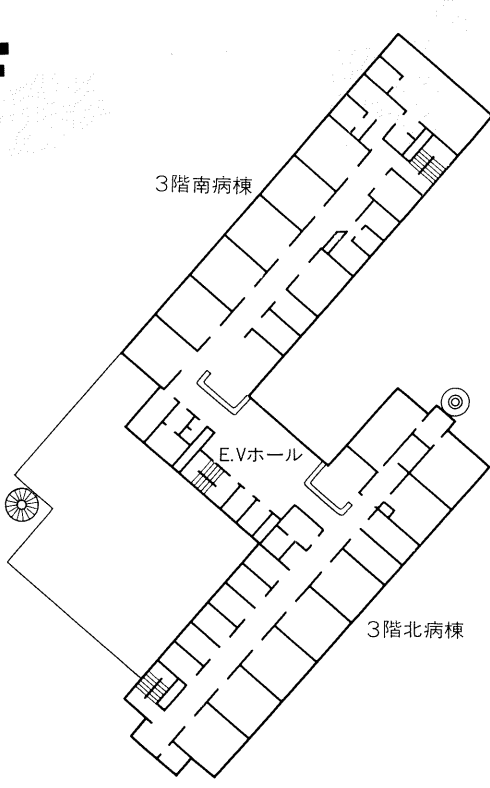
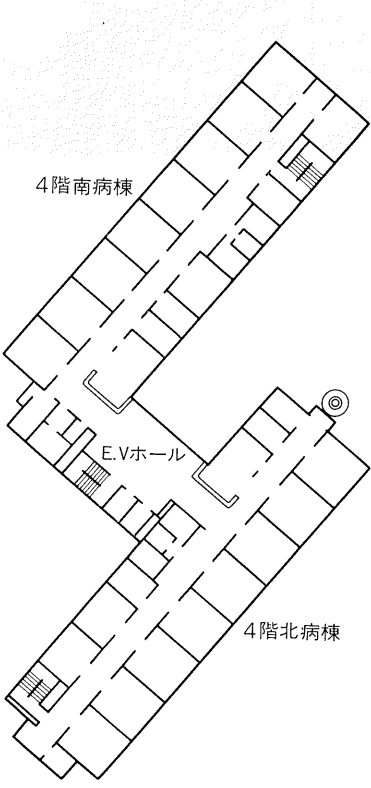
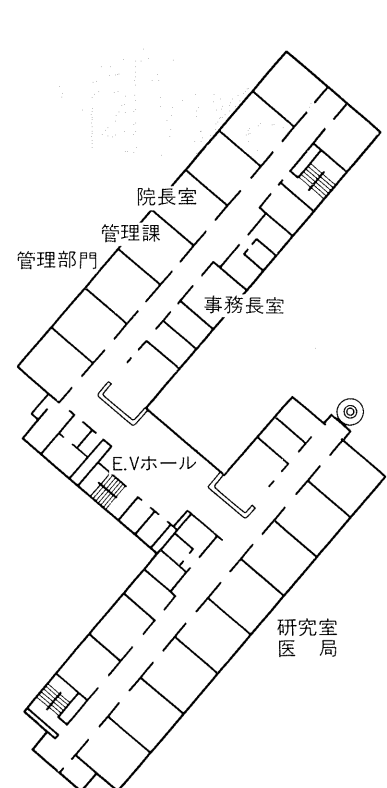
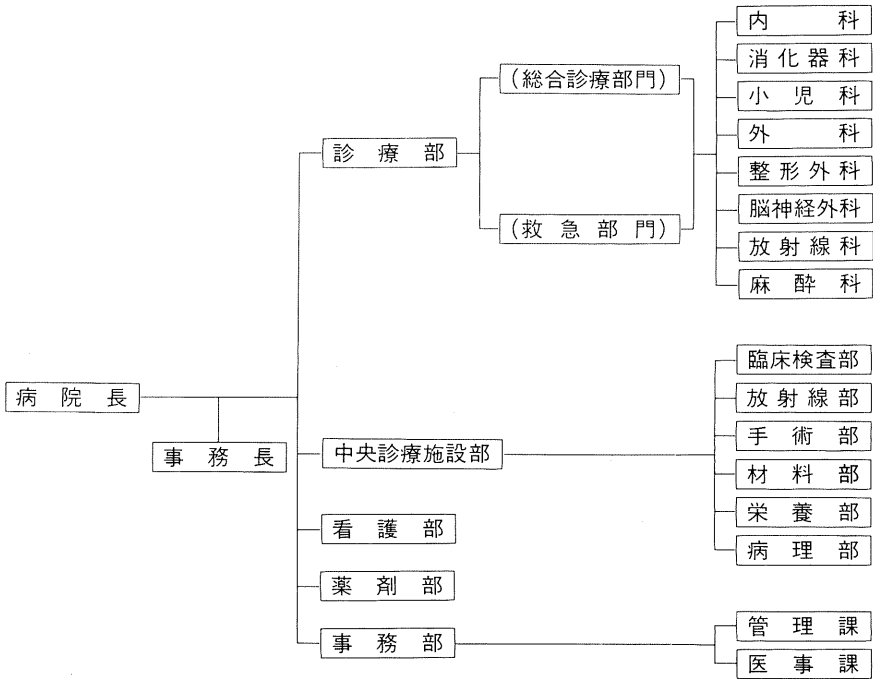


表 1 教職員・診療スタッフ

所 属	教 授	助 教 授	講 師	助 手	医 員
内 科	八 尾 恒 良		岡 田 光 男	今 川 み さ お	濱 田 修 二
消化器科			今 村 健 三 郎	奥 平 卓 己	中 林 正 一
小 児 科			村 松 和 彦	大 島 久 明	竹 中 国 昭
外 科 (消化器科)		有 馬 純 孝		土 器 潔	坂 上 明 彦
脳神経外科			田 中 彰	高 木 忠 博	内 田 泰 彦
整形外科	松 崎 昭 夫			木 梨 博 史	東 陽 一 郎
放射線科				小 金 丸 史 隆	入 江 勝 一
麻 酔 科				内 藤 博 文	吉 本 勝 彦

図 2 福岡大学筑紫病院組織図



学位取得

福岡大学に提出。昭和六十年三月二十三日付で医学博士授与。 論文名「Oddi 括約筋のプリ・性調節」 田 淵 正 延 (病理学第二) 福岡大学に提出。昭和六十年三月二十三日付で医学博士授与。 論文名「胆囊良性隆起性病変の臨床病理学的研究」	福岡大学に提出。昭和六十年三月二十三日付で医学博士授与。 論文名「中枢伝導時間(Central somatosensory conduction time)の臨床的研究Ⅱ、神経疾患、及び脳血管障害における検討」 西 田 憲 一 (内科学第一) 福岡大学に提出。昭和六十年三月二十三日付で医学博士授与。
--	---

権藤 公和
(内科学第三)
福岡大学に提出。昭和六十年三

説くところ、肩関節の屈伸の関節鏡に
関する解剖学のおよび臨床的研究」

論文名「前頭葉皮質キンドリン
グに於ける脳梁切断の効果につい
て」

① 出席の Thoracic outler syndrome” 講演③ 59・11・19

Edward V. Craig MD
 ⑧ Assistance Professor
 1

Heiderberg, New York,
Tokyo) ③一九八四 ④二一
〇〇〇〇E
西園昌久(精神実学) ①今日の

の診断指針（分担）——葉疹②
一九八五・三・十五
▽田中経一、檀健二郎（麻酔科学）
①新臨床麻酔学全書第4巻A

Anatomic variations of the dural venous sinuses. The cerebral venous system and its

大島健司 (眼科学) ①Vitreous surgery ②第10回アジア太平洋眼科学会 ③インド ④60.1.27~60.2.9

來訪

海外留学

海外出張

① “Thoracic outler” 講演③ 59・11・19
② “Rotator” 59・11・19

田中 彰(脳神経外科学)①
フメリカ②脳神経外科研修、
Microsurgeryの研修③60・
4・26・60・5・11

新刊紹介

福大医学会会員が執筆した著書
または単行本を以下紹介する。

①書名 ②発行所 ③発行年
④価格

福岡大学医学会

場所 福岡大学医学部

司会 小野 庸教授

Anatomic variations of the dural venous sinuses. The cerebral venous system and its

編集後記

業生が増加しているが、これらの方々が各方面に進出して、その広い活躍が期待される。大学病院において

も卒前・卒後の臨床教
にめ、筑紫病院が足立し
ような拡大・充実が、経
して学生の経済的負担増
いようにする努力もます
となる。本質をみる視点
対応がさらに望まれる。

(古川責)